

東アジア地域の平和構築 —日韓歴史和解の観点から—

朴 鴻圭

高麗大学 平和と民主主義研究所長

グローバル日本研究員 運営委員・教授

こんにちは。今回、広島大学の平和科学研究センターで報告することになり、大変光栄に思っております。本日のテーマは「復興と平和構築」です。阿部先生は主に最初の「復興」について取り上げ、これをどうするかというお話をされましたが、私のほうは、どちらかと言えば、後ろの「平和構築」の話をしたいと思います。

東日本大震災の時、私は本当に驚きました。それは恐ろしい場面でしたよね。しかし、2日前に韓国にも地震が起きまして、マグニチュード4ぐらいでしたが、それだけで日本のセンター試験にあたる試験（修学能力試験）を1週間延期したわけです。それは韓国が自然災害にそれほど準備していないことを意味しています。というのも、韓国では自然災害はそれほど多くありません。特に、地震、津波はほとんど経験したことがないと言ってもいいと思います。その代わりに、韓国の危険は北のほうから来るわけです。

現在、若干小康状態ではあるものの、北朝鮮の核問題は一触即発の状況が続いていますし、こういう状態の中で、韓半島および東アジア地域の平和をどうやって構築するかという話を今日はします。

この問題を扱うには、2つのアプローチがあります。一つ目は、構造的な国際システムの観点からアプローチすることです。二つ目は、行為者、すなわち国家や市民の視点からアプローチすることです。この二つの中で私は後者のアプローチに沿って話したいと思います。特に日本と韓国の間での歴史和解という観点から話します。

北朝鮮の核問題の本質というものは、冷戦の構造が崩れたなかで、どのように北朝鮮が生き残るかという話です。要するに、ソ連と中国と北朝鮮が一つの陣営になって、韓国・日本・アメリカが均衡状態を保っていたのが冷戦構造でしたが、それが崩壊し、ソ連がなくなると、北朝鮮がいかに生存したらよいかという問題が起きたのです。その均衡を保つために核を開発するのが北の戦略です。その後、経済開発する。これが、北の核と経済の並進戦略ということです。

中国の場合は、ある程度、北の核開発を認めるという側面はありますが、やはりアメリカとの緩衝地帯をつくりたいという話でしょう。しかし、この6回の核実験で水素爆弾をつくったという話になると、中国のほうも、このままではいけないという考えはあると思います。

これに対して、アメリカの場合は、北の核を認めて「恐怖の均衡」を選択するのか、それとも非核化して平和体制をつくって、韓国から米軍を撤退するかという二つの途があるのですが、両方とも難しいですね。ですから今、北も南も中国もアメリカも困っている状況です。

北朝鮮の核問題に関するシナリオを考えてみますと、一つ目は現在の休戦体制を維持すること、それで北朝鮮の核を明示的に認定するか、それとも暗黙的に認定するかということがあるでしょう。核を認めたらえ「恐怖の均衡」をとることもあり得ますが、それはアメリカにとってはあまり好ましいことではありません。二つ目は平和協定を結んで、核をなくして、米軍を撤退することです。これもなかなか難しい話です。要するに、この北と南が平和共存するのは、北が核を持っている限りなかなか難しい。次に南北統一ですが、もっと先の話ですので、シナリオとしてはあり得ますが、実現は難しいと思います。実は私はこの分野の専門家ではありません。ですから、どうなるかは予測もできないので、これからは私の専門の話をしたしたいと思います。

以上はすべて、国際体制のレベルでの話ですから、韓国が独自に行動することは非常に難しいと思います。もちろん国際共存の中で、一つの国がやることは、アメリカなり、日本もそうですが難しいので、韓国の場合、やはり国際体制の条件、それから進行状況に応じて適切な対応を取るべきでしょう。

こうなると、何ができるのかという話になるわけですが、韓国は基礎、土台作業をするべきであると私は思っています。どのような状況が起きても、それからどのような国際体制下にしても、必要な作業は何なのかということです。これは韓国が独自に行うことが可能なことすし、主導権を

握ってやるべき作業です。それは、周辺国との友好関係を維持発展することです。平和構築の障害要因を除去し、紛争の要因を排除し、信頼関係を構築すること、それが韓国にできることだと思います。分断による対立紛争よりも、統一による平和体制の構築がより望ましいという確信を、周辺国に植えなければなりません。

紛争は、いろいろな側面があります。戦争、テロを含む武力紛争もありますし、領土紛争、貿易紛争、宗教紛争、文化紛争、それから歴史紛争というものもあります。周辺国との紛争の要因をなくすという観点からすると、日本という隣国との紛争、要するに歴史紛争についてお話ししたいと思います。平和構築のために、日本と韓国との間で障害になっている歴史紛争をなくす、また管理するという視点です。

ここで若干、今日の話のテーマである復興という概念と、歴史紛争との関係について考えてみたいと思います。紛争が起きると破壊が起こります。その破壊というのは、物質的な破壊もあるし、精神的な破壊もあります。物質的な側面は、社会の基本的なシステムが壊れるということ、それから個人としては身体が倒れることです。精神的な側面は、被害当事者の精神状態が悪くなるとか、トラウマになるとか、そういったことです。国家においては、国家の尊厳性が失われる、あるいは国家のアイデンティティに関係するわけです。

それでは、ここで復興とは何かというと、原状回復であるとされるわけですが、もともと原状回復は可能かということを考えてみれば、どうもそうでもありません。物質的な側面から考えると、復興によって再現することは不可能だと思います。よくいっても、再建築、再建設ということですから、元に戻すのは不可能です。リコンストラクション（reconstruction）というのは、

元に戻すわけではなく、新しくつくることです。

精神的な側面から考えても、もともとあった傷なり障害をなかつたことにはできません。精神的な側面における傷をなかつたことにはできません。では、どうするかということになりますと、それは「成熟する」ということです。精神的に成熟することですが、それがまさに和解、リコンシリエーション(reconciliation)ということですから、リコンストラクション、それからリコンシリエーションの二つを含めて平和構築が可能だと思います。

このような観点から考えると、日本と韓国における歴史紛争というものは、長期的な問題で、理性よりも感情のほうが走るし、それからタブー、話してはいけないものがあるし、国家のアイデンティティにも関わるし、実利よりは名分が重要視されるということもあります。

それによって、皆さんがよく知っているように韓国と日本の間で慰安婦問題がありました。それは2015年12月に日本と韓国の政府の間で合意されたのですが、しかし、それは解決ではなくて、いまだに対立が続いております。膠着状況になっています。韓国の文在寅(ムン・ジェイン)大統領になって、それを何とかしようと思って突破口を探している。しかし、なかなか難しい状況です。

さて、この国際シンポジウムでは「大胆で率直な議論をしよう」というメッセージがありました。それに共鳴し、ここで私も若干、大胆な話をしたいと思います。日本と韓国の間での歴史紛争をどういうふうに除去するか、和解を成し遂げるかということで、まず日本と韓国の間での歴史を振り返ってみたいと思います。

1945年、日本が敗戦します。韓国から見れば解放されたわけですが、その後の歴史を見ると、まず1965年に日韓国交正常化がなされました。

それは、当時の朴正熙(パク・チョンヒ)大統領と金鍾泌(キム・ジョンピル)国務総理が指導して結果を出したものです。その時代を私は日韓の1.0時代と呼んでいます。

その後、1998年に金大中(キム・デジュン)大統領と小渕首相の間で日韓のパートナーシップ宣言がありました。その時を私は日韓の2.0時代と呼んでいます。そこでは、金大中大統領と小渕首相の間で結ばれたいろいろなアクションプランがありまして、それが実行されました。その後20年が過ぎて、来年2018年は宣言の20周年を迎えます。おそらく来年は、様々な行事が行われると思います。しかし私は、それを単なる記念行事だけで終わらせてはならないと思います。その中で、日韓の3.0時代を開くためには画期的な企画が必要だと思います。その幾つか私が考えていることの中で、今日は二つぐらいをお話しします。

まず、第一は、2.0時代を整理することです。2.0時代に起こったものを省察して、その準備作業を終えてから3.0時代を開くということです。まずできるのは、共同シンポジウムをやることでしょう。共同シンポジウムでは、例えば、2.0時代の歴史的な意味、アクションプランがどうなっているかということ、それから3.0時代にどのような対策を模索するかという話になると思います。そのようなシンポジウムを、いろいろな所で、いろいろな手段でやればいいのです。

2番目は、日韓の間で市民議会をつくってはどうかということです。日本と韓国の市民が集まって歴史の問題をお互いに話し合い、その中で合意できたものを発表することも大事だと思います。それによって、その会議に集まった、その会議に同席した人々の間で、国籍にこだわらず、日本と韓国の間で共同体をつくる話もできると思います。

す。日韓共同体を目指して、その共同体の話が広がると、3.0 時代を開くのではないかと思います。

こういうことを考える上で、やはり広島大学の平和科学研究センターなり、われわれの高麗大学の平和と民主主義研究所、それからグローバル日本研究院が、主な役割をはたすことができればと思います。

最後に、この 3.0 時代を開くために、和解の 3 原則というふうに私が考えていることをお話ししたいと思います。1.0 時代、それから 2.0 時代における日韓の間で行われた和解と違う方向、違う原則を立てたいと思います。

1 番目は、省察的な視覚が必要だということです。日韓の間で対立する争点を研究あるいは主張するときに、普通、自己中心的になります。自分のことに対しては目をつぶるか、あるいは相手のことばかりを攻略するということです。そうではなくて、対立が発生した原因、過程を省察的に探ることが大事だと思います。私には何の問題があったのか、相手はなぜそのような態度を取っているのかということ、均衡を持って考える、その視覚が必要です。

2 番目は、過程としての和解ということです。2.0 時代の和解というのは、加害者の謝罪を受けて被害者側の赦し、容赦、その後、和解が成立する。このようなプロセスを考えると、和解というものは最終結果です。加害者の謝罪と被害者の赦しが先行されないと、和解は成立できません。韓国と日本の中で、今、膠着状況が続いているのはそのためです。

和解というものは最終結果ではなく、一段階一段階、進んでいく上で、後々に到達することです。それは、もしかすると終わりのない過程かもしれません。その過程の中で歴史的事実を確認する共同の努力が必要であるし、確認された事実を基盤

にして、過去を記憶し、追悼すること、それから未来に向けての協力と交流をすること、このような果てのない過程、それ自体が私は和解だと思っております。

最後に、一般市民との共有です。歴史について話をしているのは、韓国の場合は被害者当事者と被害者を支援する市民団体、日本の場合は良心的知識人、極右勢力、それから両国の政府当局者です。しかし、そうではなくて、このように一般の市民が参加するオープンにされた議論の場が必要だと思います。オープンな場で歴史問題を一般市民と共有することは大事だと思います。このように過程としての和解を着実に進めていけば、韓半島の平和と統一、その後、東アジアの地域における平和構築は可能であるし、最後には世界の平和に貢献すると思います。

以上です。ありがとうございました。